

生涯学習情報誌

Life Learning

2020
Feb.
NO.354



第16回 銀粘土でつくる シルバーアクセサリーコンテスト国際展

財団後援事業



入選作品展示会場



授賞式典



←上位入賞者、審査員、相田会長、橋本議員で記念撮影。
↓主催のアートクレイ倶楽部相田会長からご挨拶。



シルバーアクセサリーコンテスト国際展 2019 が、12月17日から22日まで、東京・池袋にて開催された。回を重ねるごとに海外からの参加が増え、日本人226名に加え、21か国93名の海外の作家も出品した。財団は後援のほか、準グランプリ作品に生涯学習開発財団奨励賞を授与した。入賞作品は東京芸術劇場ギャラリーにて公開され、19日には授賞式典と交流パーティーがリビエラ東京にて行われた。

授賞式典で、アートクレイ倶楽部の相田征一会長は「銀粘土は、都市鉱山と言われる貴金属のリサイクルから生まれた画期的な素材。しかし世界中の作家が想いを込めてアイデアや技術を競うことで、単に銀であることにとどまらず驚きや感動が生まれる」とその意義を述べた。

グランプリに輝いた緑川裕子さんは、「銀粘土を始めて23年、長く続けて受賞できてよかった。モチーフのきのこはフェアリーリングといって、親を中心に輪のように子孫が広がっていく。銀粘土もそのように広がっていくってほしい」と述べた。

交流パーティーは、橋本聖子参議院議員のご挨拶、(株)オールアバウトライフワークスの菱倉英一社長の乾杯で始まり、相田会長から次回2021年のテーマ「ひらめき」が発表された。

〈グランプリ〉文部科学大臣賞

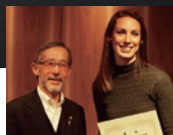


緑川裕子氏（栃木県）
リング部門「キノコたちの宴」

〈準グランプリ〉アートクレイ倶楽部会長賞



Eva Meijer氏（マレーシア）
アクセサリー部門「Nova」



〈準グランプリ〉生涯学習開発財団奨励賞



丸山昌子氏（岡山県）
アクセサリー部門「万物流転」



白磁を極め、人を育て、なお新境地に挑み続ける



陶芸 井上萬二

Inoue Manji

1929年 佐賀県有田町に生まれる
 1958年 有田窯業試験場にて磁器の研究開始
 1969年 ペンシルバニア州立大学で5ヶ月間作陶指導
 1971年～ 日本陶芸展入選、同カナダ、アメリカ巡回展、南米巡回展 招待出品
 1979年 労働大臣表彰（現代の名工）
 1968年 日本伝統工芸展初入選 以後毎年入選
 1987年 日本伝統工芸展 文部大臣賞受賞（文化庁買上げ）
 1995年 ドイツにて個展、以後、ハンガリー、モナコ、ポルトガル、ポーランド、ニューヨーク、香港などにて個展開催
 1995年 重要無形文化財「白磁」指定
 1997年 紫綬褒章受章
 2003年 旭日中綬章受章

「白磁菊彫文鶴首花瓶」
(2000年)「白磁丸形壺」
(1997年)

「白磁花形花器」(2003年)



白磁を極めて人間国宝に認定された井上氏。しかし、白磁にとられず90歳になった今も新しい表現にチャレンジしている。教え子はすでに500人、アメリカでも150人を超え、日本伝統工芸を海外に広めた第一人者。他の追隨を許さない以上の技術を得るために努力を重ね、今もなお進化し続ける。

——90歳の今も新しい作品を出し続けていますが、井上先生の作品作りの源はなんですか。

好奇心です。百貨店や工芸会の展覧会、講演などで全国を回る際、必ずその土地の護国神社に行きます。その地方で有名な人の碑文を読み、名文があればノートに控え、神社仏閣を巡っては自分の美意識を高めます。今でも年に数回は必ず海外に行き、異なった文化からもアイデアを取り入れます。

銀座WAKOでの個展が今年で43回目を迎えました。同じ会場で毎年続けるというのは非常に難しいんです。一度出した作品ではお客さんが楽しめませんから、毎年新しいものを提供しないといけない。チャレンジ精神とクリエイティブ精神を持って、挑戦し続けています。

——陶芸の道を志したきっかけは。

父親が有田の窯元でしたが、自分がやろうとは思いませんでした。私の少年時代は大東亜戦争の最中。軍事工場では勉強できないので、早く軍の学校で勉強したいと考え、15歳の時に海軍飛行予科練習生になりました。足掛け2年、過酷な訓練の日々でしたが、毎日勉強できるといのは喜びでした。一人前のパイロットになる前に終戦を迎え、故郷に帰ると、親に窯元を継いでほしいと言

われました。しかし、やるなら徹底してやりたいと修練に出て、7年間無給でひたすら修練を積みました。戦後の世の中が少し豊かになってきて、みんなは遊んでいる。修行をいつまで続けるか悩んでいました。しかし、父親の勧めで入った柿右衛門窯で、ろくろ師として名高い初代奥川忠右衛門の技に出合い、この人に近付きたいと思いました。そこでも3年間下積みして、10年経つと十二分に飯を食える腕になりました。

——でも、すぐには独立されなかったのですよね。

そこで満足せず、さらに技術を磨きたいと思い、有田にある佐賀県立窯業試験場という焼き物の研究機関に入りました。制作のノルマはなく、陶土や釉薬の研究、築炉、焼成などを徹底的に研究しながら、13年間勤めました。

窯業試験場では、有田焼の後継者育成のために研修生制度を作り、そこから500名ほどが巣立ち、日本中で活躍しています。努力していれば誰の人生においても運は必ずやって来ます。運が来たらさらに努力しなければならぬ。育成をして感じたのは、不器用ではダメだ。器用過ぎてダメということ。器用な人は努力が足りません。普通の人で努力する人が大成します。

——アメリカの大学でも指導されていますが。

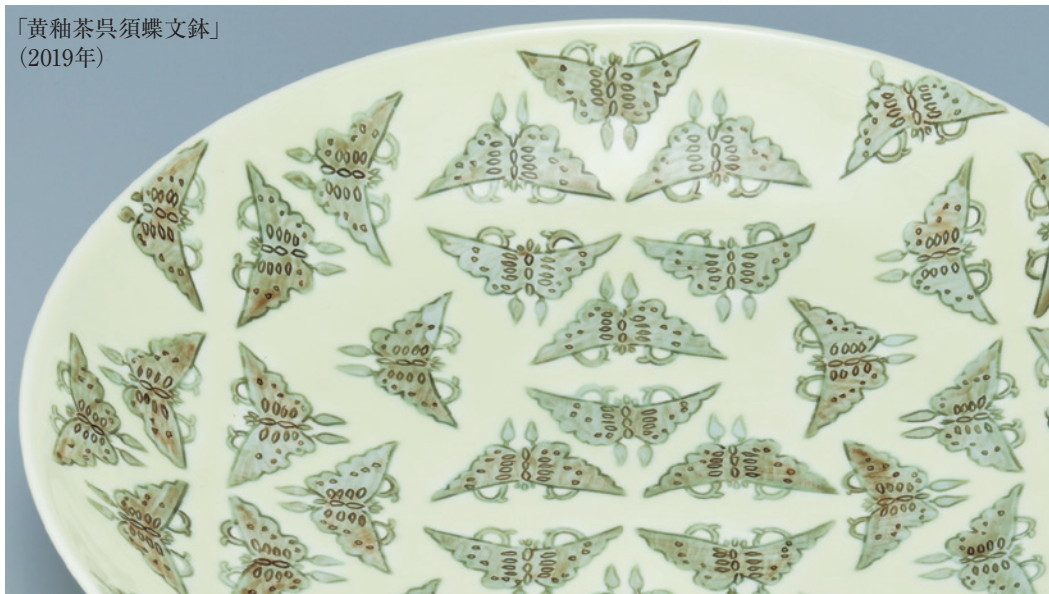
1969年にアメリカのペンシルバニア大学から、伝統工芸の指導依頼がありました。期間は半年。月給が2000ドル（当時1ドル360円だったので72万円）とももらえるのと、何よりアメリカへ行ける喜びがありました。いちばんの難関は、通訳がないこと。渡米する前の3か月間、単語を一日に5、6個ずつ覚えしました。自分で計画を立て、日本から一人で3回も飛行機を乗り継ぎ、迷わずペンシルバニアにたどり着いたのは、今考えても我ながら感心します。

講義はもちろん英語です。毎夕、宿舍のベッドに寝転んで明日教える学科の言葉を勉強し、発音などは学生た



息子の康徳さん(右・61歳)と孫の祐希さん(左・31歳)とともに三代展を開催した。ひ孫が1歳なので、あと20年長生きして四代展をやるのが目標だ。

「黄釉茶呉須蝶文鉢」
(2019年)



ちに教わりました。アメリカの学生は、日本人ではありませんが、行儀悪くテーブルに腰かけて授業を受けたりまするので、心を広く持つて接しなくてはなりません。しかし、教えてもらうことが当たり前でマンネリ化した日本の学生と違って、彼らは本当に熱心に学んでくれました。そうした人間同士の付き合いも含め、充実した毎日でした。アメリカには今でも150人以上の弟子がおり、30回は渡米しています。

日本へ戻って1年間公務員として働いて、ある方から資金援助を受けて窯を開きました。徹底的に技を磨いてから独立したので、焼き物の世界では何も恐くないという気持ちでした。

——陶磁器以外の日本の伝統文化を発信されていますね。

5力国で2年に一回、日本伝統工芸の展覧会をしています。最初のハンガリーでは、280名もの日本人を連れて訪れました。そのうち180人は女性だったので、日本の良さを伝えるために着物でハンガリーの石畳の上を歩いてもらいました。茶道や華道の先生、和楽器の奏者たちもおり、それぞれが技術を披露しました。

ニューメキシコ州の大学でも指導していますが、必ず20〜30人の観光者を連れて行き、日本人とアメリカ側の先生や生徒たちを集めて宴会をするという、楽しい交流も毎年やっています。



聞き手:上野由美子(左)

古代オリエントガラス研究家。UCL(ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン)考古学研究所在籍中。2012年国際日本伝統工芸振興会の評議員。ARTP副団長として王家の谷発掘プロジェクトに参加(1999年〜2002年)。聖心女子大学卒業論文『ペルシアガラスにおける円形切子装飾に関する考察』、修士論文『紀元前2000年紀に於けるコア・ガラス容器製作の線紋装飾に関する考察』ほか、執筆・著書多数。

祝

2019年2月 慶應義塾大学博士号(商学)取得

中川有紀子 さん (取得時54歳)

【論文テーマ】The Mechanism of HRM for Generating Women Managers: The Interaction between Top Management, Line Managers and Women
 ～女性管理職を生み出すHRMのメカニズム：経営トップ、現場管理職、女性社員の関係性～

女性管理職が増えない日本企業、その理由と改善への提言

■なぜ日本企業だけダメなのか？

中川有紀子さんは、銀行、海外メーカーの日本人、国内メーカー数社で、長く人事部の仕事に携わってきた。自分自身の経験も含め、日本のダイバーシティが諸外国に比べ極めて遅れていることを感じていた。世界経済フォーラムが2006年から発表しているジェンダーギャップ指数で、日本は常に下位に低迷し、2019年には153か国中121位と過去最低順位になった。女性の教育レベルや健康面はトップクラスで、近年は女性が働きやすい職場環境や制度が充実してきたように感じる。にもかかわらず、議員や企業管理職の女性比率の低さが諸外国ほど改善されず、足を引っ張っているのだ。

「私自身も管理職になってから、仕事と子育てを両立することに大変なプレッシャーを感じていました。当時の日本企業は、同じ総合職で採用しても、難しい仕事や苦しい仕事は男性社員に担当させる傾向にありました。それが10年続くと相当のスキルの差になって、昇進にも影響します。先進国で日本だけがこんなにダメなのはなぜだろうと疑問に思い、研究を始めたのです」

■女性管理職登用は企業業績アップのカギ

日本企業の女性管理職比率低迷をHRM（人的資源管理）の視点から紐解くため、定量分析（統計分析）と定性分析（インタビュー）を行った。

定量分析では、日本の一部上場企業745社の公表データを分析し、女性管理職比率と企業業績が極めて有意に関係していることを示した。

定性分析では、米国のGE、韓国のサムスン電子、日本の日立製作所とそのライバルであるA社、企業規模や社歴がほぼ同じ総合電機メーカー4社の人事部長にインタビューを行い、企業のトップ、現場管理職、女性社員の関係と人事システムがどう女性管理職育成に影響しているかを確認した。

日本企業のトップも女性の活用が重要課題であることは認識している。でも改善されない理由は、「トップが全社目標を掲げても、現場管理職が自分の部署では無理だからと逃げられていたのです。女性社員も、子育てをする中で長時間労働や急な出張・転勤が多い管理職を目指すより、ラクに長く働ける選択をしがちなのです」

韓国は日本以上に男性優位社会とされるが、サムスは、CEOの会社を変えるという明確な意思の



「今や女子の大学進学率は約6割と高く、その能力を活かさないのは税金や経営資源の無駄遣い」と中川さん。

もと、意図的に女性採用を強化した。そして達成度を現場管理職の評価対象とし、やらざるを得ない状況を作った。男女関係なく若手に難しい仕事を与え、伸びてきた人を管理職に登用すると、自ずと女性の比率が高まった。今のサムスはデザイン性が評価されているが、女性登用の効果によるものだという。女性役員比率も3割と伸びている。

日本企業2社は、当時から10年たち、苦しみながらも少しずつ女性登用を進めてきた日立に対し、A社は厳しい状況が続ぎ、東証一部から二部に降格するなどネガティブなニュースが多い。

■博士論文は修士論文の20倍大変だった

40代になってMBAを取ろうと修士課程に入学。「修士論文がスラスラ書けて評価も高かったため博士号を目指したのですが、修士と博士のレベルの違いに驚きました。自分の環境も、修士のときは課長でしたが、博士課程では人事部長として多忙を極め、息子2人の高校・大学受験が重なったこともあり、博士号取得まで11年かかりました。いつからでも遅くありません。頭を使うのはアンチエイジングにもなります。優しい道のりではありませんが、迷っているのならぜひチャレンジしてください」

現在は、立教大学大学院ビジネスデザイン研究科特任教授に就任し、HRM論、キャリアデザイン論、修士論文ゼミなどを担当する。また、企業の経営者やダイバーシティ関連部門からの講演依頼が月に1、2回あり、日本企業再興と社会活性化のための環境づくりに貢献している。